

白山市文化施設

白山ミュージアム



石川ルーツ交流館

石川ルーツ交流館は、石川県庁が所
在した跡地に建てられています。明治
初期に金沢県から七尾県が分割され石
川県となつたが、金沢は県の北寄りで、
運輸通信など行政上で不便という理由
により県庁が美川に移転となりまし
た。県庁の所在期間は明治5年5月28
日から明治6年1月22日までの240
日間といわれています。石川県の名称
は美川が石川郡に所属していたことか
ら名を取つたものであります。

当時の建物はなくなっていますが、
石川ルーツ交流館の敷地内には昭和37
年に行われた県政90周年記念式典で建
立された石川県庁址の石碑が現在でも
残っています。

平成14年4月に「石川ルーツ交流
館」が開館しました。古くから栄えた
美川の歴史と文化や手取川等を紹介し
ています。

手取川の氾濫を重ねた様子や治水工
事、川の構造を紹介する展示室。川に
生息する虫、鳥や魚を始め植物を紹介
した展示室。手取川流域に伝わる民話
を紹介した展示室があります。また、
寄港地として本吉港を行き交つた北前
船の資料も展示されています。

contents

■ 石川ルーツ交流館	1	■ 松任博物館	8・9
■ 千代女の里俳句館	2・3・4	■ 平成22年度行事予定等	10
■ 吳竹文庫	4		
■ 鶴来博物館	5・6・7		

4
No.
平成22年3月31日

千代女新史料の紹介

信濃僧秋水と千代女

はじめに

千代女の里俳句館の建設準備段階から始まつた長野県信濃町との交流は、本年で6年目を迎えています。

平成21年8月、信濃町の一茶記念館で、特別展「加賀の千代女」が開かれました。その中で、信濃の俳僧秋水の新史料が初めて公開され、北信地域と加賀地方の交流が、江戸時代にも盛んに行われていたことが、改めて確認されました。その一部を紹介しましょう。

秋水と千代女

正源寺廃絶により散逸していった秋水の史料が、一茶記念館や関係者の努力により、近年発見されました。

秋水は、明和元年（一七六四）、二年、三年の三度に渡って千代女宅を訪問しており、とりわけ、丙戌紀行（ひのえいぬきこう）と仮題された史料は、千代女と松任連中の状況を知る上で比類のない極めて貴重な史料であ

青年時代の寛保二年（一七四二）、千曲川の大洪水で、集落も自坊も流され家族も失っています。

しかし、秋水は京に上つて多

芸の習得に努め、とりわけ俳諧を好み、旅僧として各地を回る

中で、土地の俳人達と交流を続けて、俳諧紀行や雅帳にまとめています。

金沢から柏野へ

明和三年
(一七六六)

津幡の河合見

風の元で（為
広塚）参拝の

後、5月に金

沢に至つた秋

水は、暮柳舎

希因十七回忌

の記念句会に

参列し、8月

までいました。

ようやく

南下を始め、

松任を越えて

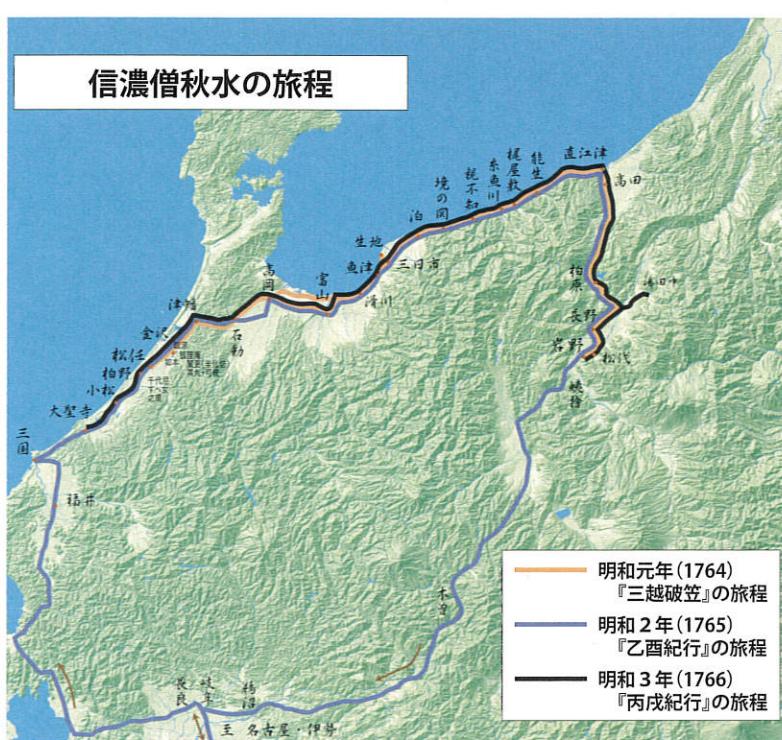
柏野に達して

り、また、当時の松任周辺の地域情勢を知る上でも、一級の史料であることがわかりました。

秋水は明和元年から毎年北陸に杖を運んで周知の仲となつており、文月はじめから晚秋まで長期にわたつて松任真教寺に杖を止めていたのです。

「金沢の逗留もいつしかかぎりある旅のなやひにや、文月九日に立出柏野といふ所へうつり、四五日新や嘉兵衛となん言し茶店に宿りけり。其所何巢といふ風人尋来て挨拶」

何巢は千代女の弟子で、柏野



の俳人です。千代女書簡第六尼素園筆河合見風宛明和三年むつき十七日付句稿付消息で「かしはのをたのみ上参らせ候」としているのは何巣のことと考えられています。この小句会には他に柏野の其葉が参加しています。新や嘉兵衛や何巣・其葉については今後研究が期待されます。



柏野宿(現白山市下柏野町)

「柏野の旅寝する比、はからず狼の荒出る事毎日毎夜其数をしらず。三里四方の人を幾らといふこともなくあやめて、暫らく往来もふつゝかけ（ママ）れ
バ、恐れて」

狼

素園筆河合見風宛明和三年むつき十七日付句稿付消息で「かしはのをたのみ上参らせ候」としているのは何巢のことと考えられています。この小句会には他に柏野の其葉が参加しています。新や嘉兵衛や何巢・其葉については今後研究が期待されます。

秋水は松任真教寺の宿坊に入ります。盆中の弘道と言うのは、説法のことと思われます。秋水は他寺では詠唱も教えており、長期の逗留から見ても単なる旅僧ではなく、崩壊した自坊を再建する勧進のため、各寺院を回る説教師を生業としていたと思われます。秋水は西派の僧なります。

真教寺

「松任の里真教寺ハ一門のゆかり有ゆへに、文月の十二日より居りて、盆中の弘道をはじめけるに、幸イ千代尼のもとへ日毎夜毎に尋行て俳話を成しけり。」

任に戻つたのです。三里四方といふので手取川一帯に猖獗を極めていたのです。平野部で狼など驚くべきことで野犬かも知れませんが、松任で鉄砲打ちを呼んだ記録などもあり、当時はなかなか大変であつたと思われます。いずれにしても秋水は、このため滯留を余儀なくされて、松

の東派の真教寺で与力を受け入れる習慣があつたので、要があるのか調べる必要があります。

真教寺は当時後町と呼ばれた辰巳町にあり、千代尼居宅のある本通りの八日市町とは背中あわせの位置にあります。間の一軒の敷地を経れば、数十mの隣家となります。それこそ近所付



海士直宗士公派 拾任直教寺

之甫との交流

之甫との交流

「ことし此文月はじめツかたより、松任の里に旅行□杖をとゞむるに、よき折からなれバと、其所の千代老尼・すえ婦人と誘れて三人三ツ拍子を躍を揃へて、三ツ物三組の風流を樂むのみ」

翌、明和二年（一七六五）の松任行では、最初から之甫宅に寄り、千代女の養子白鳥に誘れてようやく松任連中の句会に参加しています。

それが、明和三年では、最初から千代女宅が中心となつていてます。

おどり

「ことし此文月はじめツかたより、松任の里に旅行□杖をとゞむるに、よき折からなれバと、其所の千代老尼・すえ婦人と誘れて三人三ツ拍子を躍を揃へて、三ツ物三組の風流を樂むのみ」

(歌仙省略)

(歌仙参加者) 秋水・之甫・可来・

「筆右歌仙滿尾」

この「躍」についてはわかりません。俳諧の遊び方の一種でしょうか。

伊勢踊りは既に室町時代からあつたと言われていますが、藩政期を通じて日本全国で何度も流行を繰り返し、幕府も禁令を出すほどでした。

この会では、俳諧三ツ物を歌仙形式として作り、歌謡として歌いながら踊ったように見受けられます。

(歌仙省略)

秋水の長逗留も終わりに近づき、晚秋の一日、千代女主催で饅別の歌仙が開かれています。雨巾・尼右など初見の参加者が見られます。

文台開

「文台の裏書も千代尼に頼ミけるに、心より調へ侍れば、其所の連中を真教寺の旅館へ呼き一席の俳諧を催し、発句桃洞舎の主じより送らる。」

驚くべきことに、秋水は千

代尼に文台の裏書を頼んでいます。文台は、俳諧師が一人立てるときの道具で、その関係が著しく深くなつていたことと類推されます。

発句

一連の饅別句や歌仙のあとに、千代女の明和三年の発句がたくさん列記されています。千代女の作品制作年次を知る上で貴重な史料で、初見される句も含まれています。

以上の記録を見ると秋水の史料には多くの歌仙が記されていますが、千代女の参加しているものは決して多くなく、あるいは、千代女がこのころには連歌よりも俳句中心の活動を行つていることを示しているように受けられます。

他に、すへ女、之甫、沢女の句も豊富で、貴重な本史料は、今後とも慎重にねばり強く分析して行く必要があります。

(文責 千代女の里 俳句館 金山 弘明)

美川の貴重な遺産 呉竹文庫

呉竹文庫は、北前船主熊田源太郎が大正時代に設立した図書館です。

収蔵する書籍は、一万四千冊近くで、明治・大正・昭和初期の事典類・哲学・経済学・法律・歴史・文学・芸術・理工系図書など幅広く集められ、他所では容易に見る事が出来ない書籍も多く含まれています。広壮大な洋間と書庫に改装された土蔵を含

室やいくつもの和室と共に一般公開されています。開館は9時～17時（入館は16時30分まで）、休館日は月曜（祝日の時はその翌日）。入館料300円。中学生以下無料。

(文責 呉竹文庫 前一彦)



む家屋は、昭和3年に別荘として建てられたもので、茶室風な趣の和室を備え、小舞子の浜に近い手取川左岸に静かにたたずんでいます。源太郎が収集した蔵書や美術品、古文書などの資料は、平成2年以来20年、展示

「白山への道」

白山麓の伝統芸能

特に猿楽と能文化について

特別展「白山への道」は、白山の歴史と文化について毎年、テーマを定めて行う展示です。白山市発足以来、毎年開催しており、平成二十一年秋の開催で五回目となりました。

平成二十一年の「白山への道」では、白山麓の伝統芸能をテーマに、九月十九日(土)から十一月八日(日)の四十九日間の展示でした。展示は、寺社に勧進された伝統芸能と年中行事の中から行われた伝統芸能にわけて約五十点余りの資料を展示しました。

その中で、白山の美濃・越前・加賀にかつて共通してあつた「猿樂」について触れようと思います。「猿樂」とは、「能・狂言」の古形とも言われ、白山と能郷白山や近江の伊吹山の山麓には日本の能面の原点資料と思われる数々の中世の能面や面打ち師

の記録が残されています。これらのはとんどは神社の宝物もしくはご神体として大切に保管され、長い時を経て猿楽・能の文化は廃れました。

当市鶴来地区の白山比咩神社にも「黒色尉(三番叟)」「父尉」「翁」の三点の古面が残されております。面は、形状から室町時代後期のものです。

現在、猿楽や能は伝わっておりませんが、白山比咩神社に残されている古文書には、度々「猿樂」が行われた記録が出てきました。「三宮古記」(重文)には、康永四年(一三四五)・貞治二年(一三六三)の臨時祭に「猿樂」が行われたことが記されております。この臨時祭は、臨時祭次第の中に書かれているもので康永四年には、競馬、田楽、神輿渡御、猿楽、流鏑馬、相撲などが順にお

こなされたことがわかります。

このような寺社で勧進された

芸能は、白山比咩神社のみならず美濃の長瀧白山中宮、越前の

越知山の麓、大谷寺や朝倉氏の本拠地である一条谷、美濃揖斐川上流の能郷など環白山圏の山間で多くの観衆を集めておこなわれていたようです。

環白山圏で、行われていた猿樂・能文化の発展は、越前の奥越地方にいた能面師と猿楽座の存在が大きいとされています。越前で栄えた理由は、守護斯波高経が南北朝時代以降、室町幕府の管領として京に在住し公家とした大和猿楽座の芸を歓迎したことによります。永享七年(一四三五)によります。永享七年(一四三五)二月までには越前猿楽座の設立に至つております「看聞御記」。そして、越前に面を制作する面打ち師が育つてゆきました。

平成二十一年の展示では、美濃白山長瀧神社に伝わる二十六面の古樂面(重文)の内、裏に墨

書銘が残る「尉」「喝食」「女」「鬼面」の四面を借用させていただきました。

「尉」は、縦21cm、横15cmで、素材施入若衆中」と紀銘があります。でこの上の頭部、眉、口顎のあたりに植毛のあとが残り、歯には墨が入っています。額・頬の皺、やや右にゆがんだ表情は実際にいた爺を写実的に写したものだと思います。「喝食」は、禅寺に使える若い男を現した面で額の銀杏の葉のような前髪が特徴的です。縦19.6cm、横13.5cm、素材は檜です。裏面に「越前国/大旦那北の庄/奉寄進/白山御

宝前/元和二六月日/息災延命所」と紀銘されております。紀銘のとおり越前の北庄の大旦那が白山の御宝前のために寄進したものですが、面は全面にきめ細かに胡粉が厚く塗られ歯には墨が入ります。肌が柔らかい若い少年をうまく表現しております。

す。「女」は、面長の若い女性で歯は墨が入り眉の上の額左右に朱二点の化粧が施されております。また、表面に純白の胡粉が塗られており色白の若い女性をモデルにしたと思われます。縦21.8cm横14cmで素材は檜、裏面に「白山御前大施主敬白／奉施入面 文明十二月吉日」の紀銘があります。「鬼面」は、近年まで長瀧の縁年（六日市祭）の悪魔払いの演目で使用されていますが、裏面に墨書銘らしいものが見えることから赤外線による分析を行ったところ「願主／奉施入鬼面／辻坊」の銘が分かりました。「辻坊」は、天文年間にいた長瀧寺の僧であつたことから室町時代に制作された面であることが判明し、平成十九年に先に指定されていました。顔全面に紅が塗られ、歯は墨が入り目の眼球のまわりには金箔、太い眉、鬼の怖い表情ですが、すこし滑



岐阜県郡上市長瀧白山神社蔵 長瀧白山神社の古楽面（重文二十六面に内4面）
左より 「鬼面」「女」「喝食」「尉」（室町～江戸時代初期）

稽さも窺われる面でもあります。すべての面は、非常に保存状態が良く、とても室町時代から江戸時代初期に制作されたものとは思えないものです。

長瀧の能は、白山中宮長瀧白山神社の「莊嚴講執事帳」（重文）には、永禄九年（一五五六）に長瀧の僧十二人が、八幡城下へ出か

けて能三番を上演したとの記録が残っています。また同帳には2年後の永禄十一年（一五六八）に、越前から大和五郎大夫一座がやつてきて、長瀧において二日にわかつて各能七番を催し、郡内から多数の見物人があつましたが、狂言も残されています。

長瀧の能文化は、天正元年（一五七三）に越前での能文化を育てた朝倉氏が織田信長によって攻め滅ぼされたことにより、それまで越前の大和五郎大夫から指導を受けて上演されていた長瀧中宮長瀧寺の能は衰退していったとされています。

これまで説明しました猿楽・

能は中世そのままの状態の芸能は見ることができませんが、これらの古形態の猿楽・能文化を伝えている地域があります。岐阜

県の揖斐川の上流、能郷白山の麓、本巣市根尾能郷の白山神社では、毎年四月十三日に境内に能舞台が作られ、国土安穏、五穀豊穣、家内安全を祈つて村人達による

能・狂言が奉納されます。

能郷の能・狂言は、越前猿楽や大和猿楽の影響を受けながらも、猿樂衆十六戸が厳格な規律の中で現代に古い能の形態を伝えるものです。能は能方の家が、狂言は狂言方の家が親から子へ世襲的に受け継がれております。本来は、篝火の下で行われた篝能で、夜間に行われていたが、大正の初期頃から昼間の上演になつたようです。

もちろん神社には、室町時代の能面・狂言面二十一面と、室町時代から江戸時代中期の能装束十七点（いずれも県指定文化財）が伝来しております。

なによりも、神社は、集落の背後にある急峻な山に白山権現の本地仏三昧を納める本地堂の前に能舞台を設置し、能舞台の背後には能郷白山の山並みを見ることができます。本当に能舞台を設置することができとても素晴らしい能の勧進。当日は、秘仏とされている木造の本地仏三昧も開帳されます。

以上、環白山圏に残された猿楽・能文化について触れました。残されている能面は、知られていらないものを含めて神社などに多く残されております。この古い芸能に古くから興味を持ち山里に足を運んだ人物の中に、白州正子（一九〇〇）（一九九八）さんがおいでます。正子さんは交通の不便な時代より山里へ入り白山の能面を評価されました。それほど、白山の猿楽・能文化は日本の能文化の古形態を見ることができる魅力ある地域と言えるでしょう。

「白山の雷の鳥」

平成二十一年六月上旬に世間を騒がせたニュースとして、白山での雷鳥の目撃情報がありまです。この情報は後に動画で NHK の夕方の全国ニュースでも紹介されました。もともと白山には古来より雷鳥が生息しており、白山の代名詞にもなるほど白山の雷鳥は都でも知れ渡つており、

再び雷鳥が戻ってきたことは大変喜ばしい事です。白山のあらゆる伝説を描いた「白山曼荼羅」（県文 寛政元年（一七八九）能美市蔵）にも御前ヶ峰の山裾に羽ばたく「雷の鳥」が描かれております。なぜ、白山の雷鳥がいなくなつたかは不明です。今回の目撃情報は新聞報道によると六十六年ぶりだそうです。

では、ここで白山の過去の雷鳥の記録を紹介いたします。最も、中世から白山の雷鳥を特徴づける句として後鳥羽上皇の謹製句があげられます。志ら山の松の木陰にかくろいてやすらかなるらいの鳥かな

これは、雷鳥が白山の頂上部のハイ松の中に生きていることをうまく表現したもののです。

この句を受けて、江戸時代中期に、加賀藩の儒者富田景周や京の儒者伊藤東涯（一六七〇～一七三六）ら博学者の中で話題となり、このことは博学の水戸の徳川光圀（一六二八～一七〇一）まで知れ渡りました。当時、白山は、越前国と加賀国の中間で山上の杣取権を巡って争い寛文九年に白山山頂部は幕府領になつたばかりでした。

しかし、加賀藩は第五代藩主前田綱紀（一六四三～一七二四）の命により密かに梅田九栄という画家を白山の山中へ三日間派遣し八葉の雷鳥の図を水戸公へ献上したとされております。この内、正徳年間の五葉の鳥のスケッチの写しと思われる絵が白山比咩神社に保管されております。内三話は雄雌雛それぞれ個別に描かれ「加賀白山雷鳥」と注記があり、残り二葉は「越中立山雷鳥」の雄雌です。

現在雷鳥は、立山などの北アルプスや南アルプスなど高山に生息しております。夏の天候は大変不安定で、なにより雷が恐ろしい存在です。白山での雷は、横に走り直撃したらまづ即死でしょう。平成十九年夏には、雷により御前ヶ峰山頂に



白山の雷鳥の図
小原益著「白山紀行」の一部より
(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)

鶴来博物館では、平成二十二年度の「白山への道」で「白山の雷の鳥」について取り上げ展示を行きました。

（文責 鶴来博物館 小阪 大）

石川白山の獅子舞

（加賀獅子と能登獅子）

獅子舞の歴史

古来より獅子は除厄招福の象徴でした。我が国には、6世紀～7世紀頃に中国から伝わったと考えられ、奈良正倉院には、日本最古の獅子頭9面が現存しています。

獅子頭は伎楽系の二人獅子と風流系の一人獅子に大きく分けられます。前者は西日本に、後者は東日本に多いとされています。

県内では、小松市津波倉神社所有の獅子頭に元亨二年（一二三二）と、確認できる獅子頭の中では最も古く、少なくとも鎌倉時代には獅子舞が伝承していたことが分かります。また、白山市内で最古の獅子頭として、白山比咩神社に室町時代の作と思われる獅子頭二面（白



写真① ほうらい祭りの獅子舞(知守町)

山町、三宮町所有)が伝わっています。

加賀獅子と能登獅子の違いとして、一般的には加賀獅子は大獅子で獅子殺しを主体とすることに対し、能登獅子は小獅子で舞いを主体とすることとされています。獅子舞の形態としては、舞いを主体とした能登獅子の方



写真② 鵠ヶ谷町獅子頭(能登獅子の形態を持つ)

がより古様だと思われます。

市内の獅子舞

現在、市内で舞われている獅子舞は大型の加賀獅子が大半です。特に鶴来地域は市の無形民俗文化財である「ほうらい祭り」に演じられる獅子舞が有名です（写真①）。鶴来の獅子舞は、南北朝時代の白山比咩神社の記録「三宮古記」内の記述や、室町時代の獅子頭が現存していることなどから、中世より獅子

同じ市内でも尾口地域は、明治初期に能登のコバヘギ職人によって獅子舞が伝授されたと考えられていて、今もその痕跡（写真②）が見られます。一方、市内で唯一、白峰地域では獅子舞が舞われた確実な記録は確認できません。但し、伝説として朝鮮渡來の獅子頭が桑島にあつたとされていますが、それに該当する獅子頭は現在まで確認されておらず、その存在については推測の域を出ません。

市内で演じられる獅子舞の棒振りは、金沢泉が丘に道場を構えていた町田半兵衛の半兵衛流（及びその影響や教えを受けた独自流）が大半で、明治期に半兵衛流の門弟は金沢南部と旧



写真③ 松任地域の獅子舞(東一・二・三番町)

石川郡内、3町29村にも及びました。半兵衛流の棒振りには袴に「ワタリトンボ」と呼ばれる、シンボルを入れることが認められていました(写真③)。一方、白山麓鶴ヶ谷では能登獅子が伝承されたことにより、鳥帽子を被つた天狗が獅子と舞い踊りました。

棒振り

棒振りの道具には、太刀や薙刀、三ツ剣のほか、棒、十手、槍、殺しの型」は加賀獅子の特徴であります。このような「獅子殺しの型」は加賀獅子の特徴であり、特に幕末から明治にかけて流行しました。この理由として、江戸幕府に隠れての武術の稽古にしていた、あるいは獅子を佐幕、棒振りを勤皇に見立てて倒幕或は勤皇の機運を高めていた、明治維新後に職を失った武士が生活の糧として武術(=棒振り)を教えたことにより百姓町人に広まつた、等々諸説あります。いずれにしても幕末当時の特殊な世相が反映してい

たところでは素手(ゲンコツ)やケンと呼ぶ)で挑むところもあります。

棒振りはこれら道具を使用して獅子に挑み、もしくは獅子と舞い、最後には掛け声と共に獅子を打つて退治します。複数で棒振りを行う場合は、先に棒振り同士で先陣争いをした後に、協力して獅子を退治するところもあります。このような「獅子殺しの型」は加賀獅子の特徴であります。この理由として、江戸幕府に隠れての武術の稽古にしていた、あるいは獅子を佐幕、棒振りを勤皇に見立てて倒幕或は勤皇の機運を高めていた、明治維新後に職を失った武士が生活の糧として武術(=棒振り)を教えたことにより百姓町人に広まつた、等々諸説あります。いずれにしても幕末当時の特殊な世相が反映してい

るようになります。

獅子舞の将来

全国では今、伝統芸能は衰退の危機にあります。白山市も例外ではなく、獅子舞をはじめ貴重で歴史ある伝統芸能は様々な問題に直面しています。

昭和56年から5カ年にかけて、石川県教育委員会では県内の獅子舞の緊急調査を実施しました。その時、現在の白山市内では59地域で獅子舞が分布しており、内約半数の31地域で実際に舞われていました。ところが

(文責 松任博物館 山下 法宏)
参考文献
獅子頭

平成21年現在、前回の調査時よりも少なくとも5地域で獅子舞が休止断絶となりました。その最も大きな問題として後継者不足が取りざたされています。実際に獅子舞を休止した地域の多く

が、後継者、特に子供から青年の担い手不足を理由に挙げています。実際に獅子舞を休止した地域の多くが、後継者、特に子供から青年の担い手不足を理由に挙げています。これは全国的な少子高齢化や進学や就職による都

会部への流出、演じ手の中核であつた青年団組織の弱体化などに美川地域では近年、地元の熱意に支えられて獅子舞が復活しましたが、一度途切れてしまつた伝統芸能の復元には困難な面がありました。そのため伝統芸能はいかに「維持」「継続」されていくか、がとても重要な問題です。

(石川県立歴史博物館刊)
石川県の獅子頭
獅子舞緊急調査報告書
(石川県教育委員会刊)
他

平成22年度行事予定

事業計画	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
千代女の里 俳句館		市内の 俳句展	市内の 俳画展	西のほる 作品展	写真と 俳句展	石川の俳人 杉原竹女展	山野草 と 写真展	松任俳 句協会 会員展		こども達の 俳句展	千代女・一茶の ふるさと交流展	
松任博物館			「懐古時計」展 (企画展)	一品展	「わたしの宝物展」	一品展	文化財展	一品展	一品展	刀剣展	一品展	
松任中川一政 記念美術館	常設展示	出張 美術展	花を描がごう 絵画展		特別展 (9.18~11.14)				常設展示			
石川ルーツ 交流館	篠笛 コンサート	ヨシ笛 コンサート		「手取川の自然」展 夏休み体験教室	山中節を 楽しむ会	「美川博物館」展 (予定)	「東影明」展		コンサート (予定)			
松任 ふるさと館				庭園ライトアップ「七夕・月見・雪見夜灯」							雪見夜灯(2/4・5)	
鶴来博物館	「鶴来桜伝説」	鶴来と白山麓の 歴史と文化		特別展「白山への道 ～白山の雷鳥～」展		鶴来と白山麓の歴史と文化(常設展)						
鳥越一向一揆 歴史館		常設展示		企画展示(長島一向一揆)			常設展示					

※詳細については各館までお問い合わせください

ご寄付
ありがとうございます。 平成21年関係

《千代女の里俳句館》

- 「千代女 吉崎紀行」6点
白山市 西 のぼる 様

《鶴來博物館》

- 掛軸 一幅
「志士 小川 幸三」鶴来之画
白山市 車多 候代 様



編集後記



穏やかな日々の中にも、ちょっとした事の感動や驚きを繰り返し自分の目や心に訴えたものを宝物にし感謝の心を忘れずに日々過ごしている。

そろそろ「桜」の時節、今年はどんな花を見せてくれるのだろうか…………

これからも感謝は続きそうです。そして新たな力づよさをあなたへくれることでしょう。(Y・K)